キズナエピソード

遊部 いろは　6話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景：黒

自分は間違っていない。

間違っているのは相手の方だ。

互いにそう思っているからこそ、

俺といろはは自分から謝ろうとはしなかった。

……そうやって、俺達は会話をしないまま、

時間はどんどん経過していった。

//次ページ

「ねえ、君たち何があったの？」

「別に？　ちょっとケンカしてるだけだよ」

ある日、花織が見かねて話しかけてきた。

だが、どうすることもできない。

いろはのことで、花織に愚痴るのは違うし、

向こうに俺の気持ちを伝えてもらうのも何か違った。

//次ページ

花織は大きなため息を一つだけついて、

その日はもうそれ以上は追求してこなかった。

だが、しばらくして。

俺は放課後、花織に教室へと呼び出された。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//都立有羽・教室

［とびお］

「あれ、いろは……？」

［いろは］

［え、とびお……！　どうしてここに？」

［とびお］

向かった先の教室に一人いたのは、

花織ではなくいろはだった。

［いろは］

「あたしはカオリンに呼ばれてきたんだけど？」

［とびお］

「俺もだよ。

ったく、花織のやつ……」

［とびお］

俺といろはは、久しぶりに二人きりで向かい合う。

でも、今さら何を言ったらいいのか。

俺にはわからなかった。

［いろは］

「ね、ねぇ」

［いろは］

「あたしやっぱりさ、自分が間違ってるとは思わないの。」

［いろは］

「でも、よく考えたんだけど

とびおもきっと、そう思ってるんだよね。

だからその……なんていうか」

［とびお］

「なんだよ、それ。

謝る気あるのか無いのかどっちなんだ」

［いろは］

「だから、そうじゃなくて、わかってほしいの」

［いろは］

「あたしは誰かを助けたいの。

たとえ、それで自分が傷ついてしまっても。

誰かを助けられなかった時の方が、痛いんだよ…」

［いろは］

「だからさ、とびお。意地悪言わないでよ。

あたし、とびおと仲直りしたいんだよ……。

えっと、なんて言ったらいいんだろう……うぅ……」

［とびお］

「じゃあ、俺の気持ちも解かれよな。

お前が傷ついて誰かを助けるみたいにさ、

俺だって傷ついてでもお前を助けたいんだ」

［とびお］

「お前みたいにみんなを助けることなんて出来ないけど、

俺は一番大切な人を助けようと思ってるんだ」

［いろは］

「え、それってつまり……え？

……とびお、あたしのことが嫌いになったんじゃないの？

嫌いだから、意地悪言ってたんじゃないの？」

［とびお］

「お前！　あの時のやり取りのどこをどう受け取ったら、

そんなふうに解釈できんだよ!?　んなわけないだろ！」

［とびお］

「ったく。

バカは体力バカだけにしとけよ…」

［いろは］

「ご、ごめん。あたしわかんなくて……ごめん、とびお

どうしよう。あたしバカだから、

とびおのこと、傷つけちゃったよね……ごめん」

=========================スチルカットシーン開始=========================

［とびお］

戸惑ういろはの目からはポロポロと涙がこぼれてきた。

［いろは］

「あれ？　私なんで泣いてるんだろ？

あれ？　違うんだよ、悲しいわけじゃなくてね。

とびおがあたしのこと嫌いじゃなくて……嬉しくて……」

［いろは］

「あ、あれ？

えっと……どうしよ、とびお、ごめん」

［とびお］

「……はぁ。本当に世話の焼ける」

［とびお］

俺はため息を一つつくと、

いろはの胸ぐらを掴み、強引に引き寄せた。

［いろは］

「んっ……！」

［とびお］

そして強引に口を塞ぎ、いろはと心を繋ぐ。

=========================スチルカットシーン終了=========================

//【R18版の場合、ここに挿入】

//暗転

［とびお］

「……もう、大丈夫か？」

［いろは］

「えへへ……うん」

［とびお］

いろはは、いつものいろはに戻っていた。

俺の方に頭を乗せてギュッと抱きついてくる。

［いろは］

「ありがと、とびお。誰かを助けたいって気持ちも、

みんなが笑顔で居てほしいって気持ちも変わらないけど、

そのためにも自分が笑顔でいなきゃってわかったよ」

［いろは］

「本当に、ありがとう。

とびおがそばにいてくれて、良かった――」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

//白い部屋

そこで意識が覚醒した。

「……あんな可能性もあったのかもしれない」

俺はひとりごちて、白い壁を眺める。

大きなスクリーンに、いろはとの思い出を幻視する。

//次ページ

誰かの笑顔のために、なんでもしてしまういろは。

ちょっとおバカで、少し子供っぽいいろは。

子供の頃に抱いた想いを、今も持ち続けているいろは。

そして、自分を疑わずに貫き通していくいろは。

……そのどれもが愛しかった。

//次ページ

自然と胸の奥から気持ちが沸き起こってくる。

いろはを守りたい。

俺は心にそう誓った。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//6話END